The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	あらがう、りんしょう、てつがく
Author(s)	ほんま, なほ
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2023, 5, p. 9-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90062
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集１　第５回臨床哲学フォーラム（シリーズ：あたらしい倫理学）
テーマ「人の生と研究をめぐる倫理」

あらがう、りんしょう、てつがく

ほんま なほ

はじめに

ここに、みなさんが目にされるものは、2021 年の秋から冬にかけて、わたしが書いたふたつの原稿がもとになっています。[1]　おなじ年の９月、新型コロナウィルス感染拡大「第５派」のまっただなか、わたしは、タイに渡航してとある手術をうけ、その傷もいえないまま 10 月はじめに日本に帰国し、３ヶ月のあいだ、術後の痛みのために、不自由なくあるいたり、椅子にすわってパソコンに向かったりすることがかないませんでした。そのあいだに、どちらの原稿もベッドのうえで書かれ、オンラインで発表されました。これらは、おなじテーマをあつかい、つながっていますので、ひとつのものとして、ここに書きあらためることにしました。おそらく、これをはじめて読まれるかたは、そのような書き手のようすが、どうしてわざわざ、このようにはじめに書かれているのか、ふしぎにおもわれるでしょう。そのわけは、タイトルの「あらがう、りんしょう、てつがく」にこめられています。

このタイトルは、３つのことば からなっています。これら３つのことばが、「ひらがな」で書かれることにも、意味がこめられています。「臨床」と「哲学」をくっつけた鷲田清一さんによれば、「臨床」とは、「だれかのベッドサイド」、寝ているひとのそばを意味しているそうです。しかし、「臨床 clinic」ということばの由来、そして、それが西洋の歴史において意味するところを、しっかりとおもいおこしてみれば、このことばは、その「ベッド」や「床」のそばにいるひとに、とてつもなくおおきな ちから、パワーをあ

[1] ひとつは、2021 年 11 月 28 日に開催された「第３回東アジア臨床哲学国際シンポジウム」で、読み上げられた講演「「臨床」を脱構築する：臨床と人文学の制度をめぐって」、もうひとつは、同年 12 月 8 日に開かれた臨床哲学フォーラム「人の生と研究をめぐる倫理」にて、発表された「制度としての臨床哲学をかんがえる」。後者の発表では、「臨床哲学の未解決事件簿」と題して、「臨床哲学」の提唱者たにが解決できなかった、１「古典」問題、２「調査」問題、３「論文」問題をあげ、「臨床哲学を学び、実践する者は、古典とされる哲学書を読むべきか？」、「調査法をまなぶべきか？」「どのように論文を書き、評価されるべきか？」という問いにこたえました。この文章では、そのすべてではなく、３つの問いの根にあることがらについて、書くことにしました。

たえてきた、ということがわかります。その ちから、パワーは、もしかしたら、もともとはベッドのうえのひとたちがもっていたものであったかもしれません。だれが、だれのちからをうばうのか —— そのことをかんがえるためにも、わたしは、「床のそば」ではなく、文字どおり、「床のうえ」にいるもの、あるいは、かつていたものとして、書くことにしました。

机にむかうのではなく、ベッドのうえで横になり、まくらでくびをささえ、おなかのうえに、べつのまくらをおいて、そのうえでノートパソコンをひらき、片手で本をもちながら、もう片ほうでキーボードをタイプするのは、とても時間がかかります。パソコンやインターネットなど、最新のテクノロジーにたすけられながらも、くびはかたくなり、どちらの手もしびれてきます。それでも、なにかをかんがえているあいだは、からだのことは、わすれられます。いったいいつになったら痛みはなくなるのだろうか？　いつあるけるようになるのか？　そういった不安につつまれながら書かれた「「臨床」を脱構築する」という文章を、わたしはオンラインで開かれた国際会議にて日本語と英語の両方で、やはりベッドのうえから、発表しました。でも、このタイトルが気にいりませんでした。しょうじきなところ、「脱構築」ということばが——この翻訳語もふくめて——むずかしすぎます。じぶんでも、理解できているのかわかりません。どちらかといえば、わたしがやりたかったのは、「臨床」の概念をいまさらどうこうするよりも、臨床医学も、ベッドサイドも、どちらもわすれてしまって、「りんしょう」という音のゆたかさをすくいとってみることでした。[2] その音とともに、なにかがあたらしくうまれるために、賢者の学問としての哲学ではなく、「てつがく」という音から、ひとが、なにかをききとり、おもいえがくことができるように、そう、ねがいをこめて。

[2] この会議では、「臨床哲学 clinical philosophy」というなまえを医療や治療めぐる哲学という意味でつかう東アジアの研究者があつまっていました。そのようなうごきにあらがって、わたしは「臨床」を “clinical”と訳すのではなく、翻訳不可能な「りんしょう」“rinsho” という音によって表現し、“rinsho philosophy” と表記することを提案しました。

1　路上の床 —— 声はつねにぬすまれる

> 私にとって、かれらについて「書く」ということは、私と路上の友人との間に「書く」者と「書かれる」者との非対称性をはっきりと生じさせるだけではなく、かれらを物理的に「殴る」ことと同等の暴力であり、とても受け入れられなかった。なにより、路上の友人たちのほとんどはおそらく一生読むことがないであろう「学術論文」を、かれらの「声」を基に書き、「業績」をあげる、ということをしたくなかった。それは、少なくとも当時の私には、自分自身と路上の友人に対する裏切りであり、倫理的にどうしても超えられない一線だった。[3]

これは、堅田香緒里が、福祉社会学をまなんでいた学生時代に、路上で生活するひとたちへのききとり調査に参加したことをふりかえって、書いたことばです。堅田によれば、この調査の目的は、路上で生活するひとたちを「脅威」とみなす地域住民たちがいだいている「誤解」をとくことでした。しかし、彼女にはその目的をもってしても、「かれらについて「書く」こと」は、「友人に対する裏切り」と感じられたのです。それは、研究をまなびつつある初学者にありがちな、ためらいにすぎないのでしょうか。わたしは、そうおもいません。「書く」ことは、書くひとに、ちからをあたえますが、ときに、それは「書かれる」ひとから、なにかたいせつなものを、うばうことにもなります。彼女が、はだでかんじとり、あらがったのは、なんでしょうか。それは、目的や成果を理由に、だれから、なにかをうばいとることを正当化する「制度」そのもの、そして、その「制度」のなかに「書く」ひとが安住することではないでしょうか。

> 私は、人生のある時期を、（そのように言うことが許されるのであれば）「ホームレス」の人と共に生きていた。屋根ありか屋根なしかという生活の差異はあったけれども、かれらは私にとって友人のような存在で、かれらの「声」に一方的に耳を傾ける、というよりは、互いの「声」を交換したり、あるいは一緒に「声」をあげてみたりしていた。言うまでなく、そこで「声」は応答の対象であり、調査や分析の対象ではなかった（誰だって、友人を調査や分析の対象とみなすことには抵抗があるだろう）。そうした関係の中では、かれらの人生の片鱗に外側から「触れる」というような経験は生じない。私たちはただ、それぞれの人生の時間と空間の一部を共有し、それぞれ必死で生きていたのである。[4]

---

[3] 堅田香緒里『生きるためのフェミニズム：パンとバラと反資本主義』（タバブックス、2021 年）p.89.

[4] 同書、p.91-92.

路上という床で、ときには、屋根のある床のうえで、ひとびとは、「ただ、それぞれの人生の時間と空間の一部を共有し、それぞれ必死で生き」、声を交換し、応答しあい、ともに声をあげる。そこに、研究の倫理を口にする者がやってきて、しかるべき目的をもって研究対象者にインタビュー調査についての説明をおこない、同意をもとめる。そのあいだに、「倫理的にどうしても超えられない一線」がひかれているとすれば、それは、なんでしょうか。

一方で、ある場所にいる〈だれか〉のまえで、〈だれか〉として、そこにいあわせ、相手のまなざしを受け、わたしの声が聴かれ、ふれられ、応答することが求められるような、まさに〈対話〉とよぶことができる現場があり、そこで、あるひとの生に、おなじ生と死をわかちあうものとして、かかわること。他方で、ある目的をもって、そのようなかかわりについて、書き、考察し、発表することを通して「研究」という顔のない枠組みのなかで、文字になった「声」がなにかを証明したり、しそこねたりすること。

声を聴く、とはどういうことでしょうか。堅田が書くように、交換し、応答すべきもの、ともに声をあげるものではない声は、ほんとうに声なのでしょうか。もし、わたしたちが、だれかが話すことをきき取り、それを筆記し、切りとったとしても、それはそのひとの声を聴いたことになるのでしょうか。あるいは、文字にはならない表情や声のトーンを克明に「記録」するために、ビデオカメラを構えて撮影することで、そのひとの声は聴かれたことになるのでしょうか。音声または文字として記録され、切り刻まれ、解釈をされることを待つ「データ」は、はたして声なのでしょうか。こうした問いは、わたしたちの目を、声と書くことの制度の関係へとむけさせます。

「語る」ことから「聴く」ことにむかう「臨床哲学」は、ざんねんながら、こうした声をめぐる問いについて、まだ一歩もふみだせていません。「臨床」についての思考は、「ひとが特定のだれかとして他のだれかに遭う場面」、そして、そこで「じぶん自身も変えられるような経験」[5]、さらに、「《注意》をもって聴く耳があって、はじめてことばが生まれる」がゆえに、「苦しみの語りは語りを待つひとの、受動性の前ではじめて、漏れるようにこぼれおちてくる」[6]、と書いています。「臨床」についての思考は、あたかも、〈聴く–聴かれる〉、そして〈専門家–対象者〉の非対称性をいともたやすくのりこえ、「自–他、内–外、能動–受動という区別を超えたいわば相互浸透的な場」[7]としての「他者の声を聴く」経験にふれているかのように、みえます。しかし、このような思考による記述は、「声」と「聴く」こと、さらには「読み–書く」ことをめぐる血なまぐさい関係と制度の問いを、かろやかにすりぬけてしまいます。「臨床」ということばは、漂白され、色のないとうめいな制度となって、くらやみのなかでさけび、血で書く肉体と、生に

[5] 鷲田清一『「聴く」ことの力』（TBS ブリタニカ、1999 年）p.143.

[6] 同書 p.163.

[7] 『「聴く」ことの力』 pp.194-195.

あかるいひかりをあてる思考の特権性をてばなさない書物や「研究」のあいだにある、ふかい〈さけめ〉——性、性別、階級、民族、地域のちがいが、きしみながらうみだすそれを——をみえなくしました。

２　流しの床 —— 書けない者と迷っている者

文学もことばも女の手もとにはないのです。ひとりではどうしようもありません。言わねばならぬ問題をもっているが書けない者、書く技術だけ知っていて何をやらねばならないか迷っている者、そんな者がよりあって、このように裂けている女の実情を考えましょう。そして、個人のものでなく女のものを作り出しましょう。そのことをぬきにして個別的に書ける、話せる顔役になっていく者は、自分の足もとに開いているナラクの深さをみるべきです。

各地に散在して困難をかかえている女たち、集まりましょう。一つの「流し」へ。書けないものは技術者をつかまえてきて話し合いの場を作ることです。そして共同で一つの問題を文字化して、この「流し」へもってきてください。[8]

1940 年代後半に日本各地域ではじまる文学、うたごえ、演劇、美術などのさまざまなジャンルからなる「職場サークル」運動のたかまりとともに、1954 年前後に「文学サークル運動」も隆盛をきわめ、さらにそこに「生活記録運動」も合流するかたちで、労働する女や男たちのなまのことばが雑誌につづられていきました。[9] 上野英信、上野晴子、谷川雁とともに九州、筑豊の中間にくらしながら、交流誌『サークル村』[10] の活動にたずさわった森崎和江は、ことばに絶望しながらも、ことばを渇望し、ことばをつむぐ炭鉱労働の女と男のすがたを、みずからの感情をとおして、とらえています。

---

[8] 通信誌発行準備会「凍っている女たち、集まりましょう」より。『サークル村』1959 年 7 月号、p.49（『復刻版サークル村』第２巻、不二出版、2006 年、所収）。「流し」とは、女たちが水仕事をしいられてきた、洗濯や炊事をする場所のことをさしています。水溜真由美は、森崎による『無名通信』へのよびかけを、その後に展開される「ウーマンリブのコンシャスネスレイジング」につながるもの、と考察していますが、（『「サークル村」と森崎和江：交流と連帯のヴィジョン』ナカニシヤ書店、2013 年、p.255。）むしろ、「共通の抑圧」をうったえるアメリカや日本のウーマン・リブ主流派が中産階級・主婦といった人種、エスニシティ、階級特性を脱却できなかったのに対し、植民地支配化の朝鮮半島でうまれ育った森崎が、性別、階級、職業、エスニシティ、識字、能力、障害の交差するところから問いをふかめ、そこから離れざるをえなかったことを、わたしたちは十分に受けとめなければなりません。

[9] 水溜、前掲書、pp.37-41。また、サークル活動のひろがりと限界については、以下を参照：宇野田尚哉・川口隆行・坂口博・鳥羽耕史・中谷いずみ・道場親信編『「サークルの時代」を読む：戦後文化運動研究への招待』影書房、2016 年。

[10] 『サークル村』は、九州サークル研究会によって 1958 年から 1961 年にかけて発行された交流誌。第１期（1958 年 9 月～1960 年 5 月）の編集は、上野英信、木村日出夫、神谷国善、田中巌、谷川雁、田村和雅、花田克己、森一作、森崎和江。

いま私の手もとには『サークル村』は残っていない。私にはあの運動の本質は数冊の活字の上に見られるとは思えないのである。……頭をかすめていくものは、しぼり出したにきびの後の如き残渣への無惨さばかりである。けれども短命で浅薄で卑小な姿で対象化されるものへ、おのれを駆りたてるよりほかにないという会員らのぎりぎりの思いが、あのあしかけ三年ほどつづいた雑誌の外に生きていた。あの沈鬱さによって、私は労働者がことばを通して創り出すということの、感情を知った。

私は活字となったものが、評価にたえないといっているのではないのである。そのように形象化されたものに対する労働者らの、いうにいわれぬ無念さのほうが、いかに深く、いかに固く、そしてほんものであったかを伝えたいのだ。そして三年の間に、彼らは、自分の本質と自己対象化のために借用したことばとの距離を意識でとらえて用いるようになっていた。表現されたことばの無惨さに、互いに無意識に目をそらしあった。[11]

職業、学歴、世代、地域、性別などのちがいを橋わたしするために、ひとびとはあつまり、語りあい、雑誌のうえにも切実なことばたちがつらねられていました。[12] しかし、森崎は、そのように活字となったことばによる対象化や形象化よりも、むしろ、「雑誌の外に生きていた」思いと感情にふれようとします。「創刊宣言」でかかげられた、「大衆の共同体的思考の本質」であるところの「沈黙・空白を核心にすえた表現」によって「横の連帯感の潜在」を論理化する、という谷川の理想を批判して、彼女は、そのようなかつて共同体をなりたたせていたはずの沈黙の連帯と、共同体をわけへだてていく「あたらしく発生しつつある無言」とを、質のことなる沈黙として、ききわけようとします。土着の農村共同体からきりはされ、紡績工場や炭鉱労働などへ労働力が組織化されていくなかで、「つぎつぎに生まれた大衆には意識されている無言地帯」、「吸い込まれるようにことばが失せていくところ」[13]——この無言のうちに、「沈黙を表現しようとして労働者の自己保存と破壊との二面をふくんでいる箇所を通過するとき」の「混乱」そのものを森崎はききとります。[14]「共有喪失感覚の場にうまれているものを表現しえない」ことと、そして「「ひとりっきりの共有」という不条理」にあることのあいだで、[15] 無言の混乱を生きざ

[11] 森崎和江「『サークル村』創刊宣言」（1968 年）（森崎和江評論集『ははのくにとの幻想婚』所収）pp.112-113.。

[12] 森崎和江『闘いとエロス』（三一書房、1970 年）第２章「サークル村」に、いくつかの書きものが転載されています。

[13] 森崎和江「破壊的共有の道」（『サークル村』1959 年 10 月号、『精神史の旅２地熱』藤原書店、2008 年、所収）p.90。

[14] 同書、p.92。

[15] 同書、p.94。

るをえないこと。それは、植民地主義のもとで故郷をうしなった彼女にとっては、歴史的な必然性としてかんじられたのです。『サークル村』で、語ること、書くこと、書かれたことばたちは、なにかをたくみに写実することもなく、あるいは、思想とみなされるものに結晶することもないまま、後悔と矛盾、ためいきと声の応酬でみちています。応酬は路上でもつづきます。

> 或る日私は八幡の労働下宿街をうろついていた。しばらくしてむこうから誰かが近づいてきた。「いいねえあんたは。またぼくらを題材にして考えごとをするんだね」そう彼がいった。サークル村会員の一人である孫請け工であった。私は「私だって女一般として素材にされっぱなしだけれど一向に女をとらえたものにお目にかからないから出歩いているのよ」と応じた。[16]

労働者たちがその共同性から分かたれて「個人」になるために、かえって集団をもとめた、という事実を森崎はしかとみつめていました。「直接的な関係を持つ村人なしには書くこと話すことが不可能であることを知っていた」サークル村のひとたちのことばとからだは「互に飛び石だった」。つまり、彼らは、経験をことばにし、記述するためではなく、むしろ、集団であるためにことばを欲したのです。「労働者たちは、一人の聞き手を創り出すことが、話し手となることであるという、相互関係を確立することを、ことばによる創造活動とせねばならなかった」。[17] ことばによって聞き手をつくりだす——このいとなみを、森崎自身は、こうした労働者たちのように集団を欲するのとはちがうしかたでひきうけ、その生涯をかけて、おいもとめました。

森崎がよびかけた「裂けている女たち」のための交流誌活動でも、だれもが、かわるがわるに、聞き手と話し手となって、ことばをかわしました。サークル誌『無名通信』[18] に掲載された座談会では、「女たちは何が欲しいのでしょう」「女の故郷とは何でしょう」などのテーマについて、「書くことに無縁であった」女たちが語りあっています。語りあいのサークル、輪では、沈黙して一方的に声を聴く者はいません。おしゃべりを通していくつもの声が重なりあいながらも、けっしてひとつになることなく、反響しあいます。[19]

---

[16] 『ははのくにとの幻想婚』p.114.

[17] 同書 p.113.

[18] 森崎和江『闘いとエロス』第四章「無名通信」。雑誌『無名通信』は 1959 年から 1961 年まで、毎月発行され、会員に配布された。「「無名通信」宣言」の冒頭には、「わたしたちは女にかぶせられている呼び名を返上します。無名にかえりたいのです。なぜなら、わたしたちはさまざまな名で呼ばれていますから。母・妻・主婦・婦人・娘・処女……と。」（同書 p.87）と記されています。

[19] わたしは、2018 年に大阪大学にて開催された第２回東アジア哲学会議（第１回アジア臨床哲学会議）にて、「臨床哲学とフェミニズム：〈聴く〉から〈ともに語る〉へ」と題した発表をおこない、「だれが

たとえ、そこになんらかの知識や技術・専門を身につけただれかがくわわったとしても、そのだれかは、名前をもつ者、あるいはもたない者として、声に応答すべき者として、おなじように語り、すがたをみられ、聴かれなければなりません。あつまった女たちは交流の場が必要だとうったえます。しかしそれでも、「わたしたちがかもし出した主題が、個体の諸体験や感覚の論理化などで開拓できぬことを知った」森崎は、「わたしたちの交流の結果を各自が肉体化する時間を持ちたい」と、強引にこれを解散してしまいます。[20] 聴くことは肉体化されなければなりません。彼女はそのための時間をもとめたのです。床のうえで、床のなかで、あるいは、「流し」を床にして、あるいは、まっくらな地の底で、おもい肉体をひきずり、おなじおもいを、ことなる声でくりかえしながら、いつまでもうたをつないでいく炭鉱労働歌の輪唱となるように。

坑夫坑夫とけいべつするな
石炭畑にははえやせぬ

文句ぬかすとセナ棒でどたま
さらし手ぬぐい血で染める

米はあがるし切賃はさがる
五銭バットも吸いかねる

たばこどころか今日このごろは
くさい三等米も食いかねる

娘やるなよ坑夫の妻に
ボタがどんとくりゃ若後家女

七つ八つからカンテラ提げて
坑内さがるも親のばつ

汽車は炭ひくせっちん虫は尾ひく
川筋下罪人はスラをひく [21]

臨床哲学を行うのか？」という問いをたて、それまで臨床哲学において重視されてきた「聴く」ことに対して、これまで一方的に観察され、語られる「対象＝もの」とみなされてきたひとたちが、感じ、考え、表現する、〈ともに語る〉主体へと変容する語りあいの実践に着目し、さらに、第２回会議では「フェミニズム臨床哲学とクリエイティヴ・ライティング」と題して、声を書くことの可能性を示しました。

[20] 森崎『闘いとエロス』p.92。

[21] 森崎和江「地の底のうたごえ――私の好きなひとつの詩――」より（『ははのくにとの幻想婚』pp.135-136.）。「坑内仕事唄は明治・大正・昭和のはじめ頃に主として作られています。無名の誰かが

３　診療所の床 —— 対象を観察し、対象に語らせる場

だまって聴く、耳をかたむける、じっとみる —— このようなおこないは、いったいだれに、どのような、ちから、パワーをあたえるのでしょうか。ここでは、視点をかえて「臨床」ということばのはじまりにあった、“clinique”[22] についての記憶をたどってみることにしましょう。

原理でも、応用でもなく、個別事象が全体に変更を生じさせる、という思考のモデルは、けっしてあたらしいものではありません。理論体系の「外」に出て、個別の対象にまなざしをむけ、当の対象が語るのを「聴く」という態度。この意味での「臨床」をめぐる思考は、ふるく 18 世紀までさかのぼります。

> 観察するまなざしとは、介入することをさしひかえるものである。それは口をきかず、身ぶりもしない。観察はものを、あるがままに置く。観察にとっては、呈示されるものの中に、何も隠れたものはない。観察に対応するものは決して不可視的なものではない。理論は理性に対して障礙物をひきおこし、想像力は感覚に対して障礙物をひきおこすものだが、こうしたものがひとたび取り除かれれば、観察に対応するものはつねに、直接に見えるものである。臨床医学者の研究対象においては、まなざしの純粋性は、じっと耳を傾けることを可能ならしめる或種の沈黙に結びついている。諸体系の饒舌な論述（ディスクール）は停止しなくてはならない。[23]

ミシェル・フーコーは、それまでの医学の理論体系とは異なるしかたでうまれた「診療所」（clinique）についてこう書いています。そこでは、対象にむかう「まなざし」がある象徴的で特権的な役割をにないます。つまり、「臨床」、クリニックという場所における「まなざし」は、見る、聴く、触れる、嗅ぐ、味わうという「五感という忠実な案内

口にし、それを誰かがうたい、坑内で生まれた子や七つ八つから両親といっしょに石炭を掘った少年少女がそれを今日に伝えているのです。」（同所）スラとは石炭を地上に運び出す籠のことで、森崎は『サークル村』に「スラをひく女たち」というタイトルで 1959 年（７～９月号）から 60 年（２～４月号）にかけて連載され、『まっくら：女坑夫からの聞き書き』（理論社、1961 年）にまとめられました。

[22] ここでは、語源といわれる古代ギリシア語の “κλίνη”（klínē、ベッド）、“κλῑνῐκός（klīnikós、ベッドの、寝たきりの、または、ベッドのうえの病人を世話するひと、医者）についての思弁にはたちいらないことにします。すくなくとも、これらのことばが「床」にかかわるものであり、また、「ベッドサイド」でもないことを確認しておきたいとおもいます。

[23] ミッシェル・フーコー『臨床医学の誕生』（神谷美恵子訳、みすず書房、1969）p.152。（強調は引用者）（Michel Foucault, *Naissance de la clinique: une archéologie du regard médical*, P.U.F., 1963, p.107. 以下、括弧内に原書のページ数のみを付す。）

者」[24] によって、真理へと到達すべき「病床の傍らでの医学実践そのもの」（l'exercice même de la médicine *auprès du lit des malades*）[25] と考えられました。そのような臨床医学にとって、対象そのものがあるがままに語りだすために、理論は沈黙しなければなりません。

> 「あらゆる理論は、患者の病床においてつねに口を閉ざすか、もしくは消滅する」。同様に想像力の語ることばも省かれなければならない。想像力のことばは、知覚されるものを侵害し、幻想にすぎない諸関係を発見し、五感には達しえないものを語らしめてしまう。「完全な観察者というものは、想像力を沈黙させておき、しずかな心で、自己の判断をさしひかえ、現にはたらしている一つの感覚の報告するところを待っていることができる人である。そういう人の、何とまれなことであろう」。まなざしが沈黙の中で事物の上に注がれるならば、そして、もしまなざしの見るもののまわりで、すべてが沈黙するならば、まなざしは自分自身の真理において完成し、事物の真理に到達することであろう。臨床医学的なまなざしというものは、一つの逆説的な特性をもっていて、ある光景を知覚する瞬間に、ある言語を聞く。つまり、臨床医学においては、現われ来たるものは根源的に語るものなのである。[26]

このように、「臨床医学のまなざし」は、その誕生から、想像力のことばを沈黙させ、「五感」という案内人、つまり「観察」に導かれて「症候・症状」（symptôme）をあるがままに記述することを宿命づけられています。そこで、沈黙を強いられるのは、理論だけでなく、想像力のことば、です。その沈黙のなかで語りはじめるのは、声ではありません。むしろ、まなざしのまえで「事実」が語りはじめるのです。「そこで問題とされる個人は、病める人間というよりは、むしろ、あらゆる同病者において無限に再現しうる病理的事実なのである。」[27] つまり、「症例」（cas）そして、臨床のまなざしがむかうのは、再現可能な「症状」や「病気」そのものであって、ひとではありません。「患者は自己の病気の特殊性を隠すと同時に現わすもの」[28] にすぎないのです。患者は真理についてなにもしりません。臨床医学は、症状そのものが語る言語を理解し、隠されたものをあら

---

[24] 同書、p.170。（p.121）

[25] 同書、p.148。（p.105）強調は引用者。

[26] 同書、pp.152-153。強調は原文による。ここで、フーコーが引用しているのは、Corvisart, *Nouvelle méthode pour reconnaître les maladies internes de la poitrines*,（Paris, 1808, Auenbrugger の訳への序文、p.8.）。（pp.107-108）

[27] 同書、p.139。（p.97）

[28] 同書、pp.148-149。（p.105）

わにするための「文法」をたずさえた、真理に到達する「哲学の営み」になぞらえられます。つまり、「臨床」と「哲学」は、そもそも「近縁関係」にあったのです。[29]

このように、臨床（“clinique”）とは、その起源において、ひとが、みずからの真理から疎外され、その真理のために他のまなざしを必要とし、そのまなざしに特別なちからをあたえる場所になりました。はたして、20 世紀に登場したあたらしい「臨床」の学問において、こうした基本の構えはかわった、といえるのでしょうか。たとえ、理論体系からとびだして、こころや社会に積極的にかかわろうとするにしても、そしてまた、「観察のまなざし」が洗練され、それが「ひと全体」に拡大したとしても、「対象」ならびに「対象者」そのものに語らせることに成功することが、すぐれた臨床の実践となるのでしょうか。[30]

いずれにしても、「臨床＝診療所」という特権的な場所と関係において、臨床家は、観察と聴取を通して、当人にはあきらかではない「問題」を記述し、その意味をあきらかにすることによって、病気や問題に対する治療や解決を講じるとともに、それらの行為を「症例＝ケース」として「研究」全体の一部に帰属させることを、期待されます。いわば臨床研究は、どのような発見もみずからの成果にする貪欲な制度にほかなりません。しかし、もしそうだとするならば、臨床研究はひとからなにかを語らせ、聴きとり、それについて書くことによって、声にであい損ねるのではないでしょうか。しかも、相手の声のみならず、みずからの声もうしなうことにならないでしょうか。なぜなら、声を聴くとは、沈黙することではなく、堅田がいうように、応答すること、または、おなじ状況にむかって、ともに声をあげること、あるいは、森崎の書くように、たがいに無言のことばを肉体化することにほかならない、とかんがえられるからです。応答し、声をあげるため必要なのは、むしろ、「幻想にすぎない諸関係を発見し、五感には達しえないものを語らしめてしまう」と断罪された、想像力のことば、ではないでしょうか。「臨床」は、それが積極的に対象にかかわり、注意ぶかくまなざし、耳をかたむけようとすればするほど、ひとと〈であう〉場面から退くとともに、みられるもの、きかれるもの、ふれられるものとしての身体をうしなって、書かれるものの制度のなかに引きこもる、声なき思考になってしまうのでしょうか。

---

[29] 同所。

[30] ただし、患者をまえにした個々の実践が、すべてこの「まなざし」に還元されると判断するのは性急におもわれます。ここで問題にしているのは、個々の患者のまえでの医療実践よりも、それを可能にし、かつ研究とむすびつける制度のありかたについて、です。

4　舟の床 —— さつきは床で踊っていた

「臨床」とは、このような矛盾をはらんだ宿命を負っている、といえるのかもしれません。それを冠してしまった「臨床哲学」は、はたしてこの冠をぬぎすてるべきでしょうか。それとも「臨床」と「哲学」の歴史的な出会いによって、臨床医学からはじまるこのような命運に、予期せぬ結末をもたらすことができるのでしょうか。哲学の「臨床」化、つまり、哲学による診療、観察、治療ではなく、あるいは、だれかの「人生の片鱗に外側から触れる」のでもなく、「知識人と称する人々」が「混沌」とよぶ大衆の状況に「下降するモラル」となることもなく、[31] 臨床の哲学的変身あるいは床上げの哲学とでもいうべきものを、わたしたちは夢みることはできるでしょうか。

さきでふれたように、観察と記述、分析と解釈にむかう道は、ひとと声に出会い損ねてしまいます。応答をもとめる声を文字にし、読み、それについて書く、という一連のプロセスは、一方向で不可逆な全体へと統合する「認識」と「研究」の制度に従属してしまいます。「哲学者が、（学者が、あるいはたんに真理を求める者が、）他には何も要求されることなく、自分の主体としての存在が修正されたり、変質せしめられたりする必要もなく、彼自身で、ただ自分の認識行為によって真理を認め、それに到達できるようになったその時」——フーコーはそれを「真理の歴史の近代」とよびます。[32] しかし、そのような制度よりも古い記憶をもつ、哲学のいとなみは、対象化とはことなる生と死へのかかわりを探究してきたのではないでしょうか。その反響を、わたしたちは石牟礼道子の作品のなかにききとることができます。

水俣を生きるひとびとを描いた石牟礼道子の『苦海浄土』、その第１章「椿の海」は水俣、湯堂にうまれた少年、山中九平との「出逢い」からはじまります。学生服のうえに父親と姉ゆずりの漁師の綿入れをきた九平少年は、手にした石を宙になげて棒をふっています。石はふられた棒にあたらずごろりと地面におち、彼は手さぐりで石をさがします。それは彼のとっておきの石であり、野球のけいこらしい、その「作業」をみていた石牟礼は「彼の動作があまりに厳粛で、声をかけることがためらわれ、そこに突っ立ったままで、少年と呼吸をあわせて」[33] いました。しばらくの間をおいて彼にちかよって名をよぶと、「彼と無音の部落とでつくりあげていた調和」[34]がくずれ、彼はとてもおどろいて棒をおとし、戸口のうちにはいってしまいます。「よそから、水俣病患者を視察あるいは見舞いに来るものや、市立病院、熊大関係者や、市役所吏員たちや、そして私のようなえたいの

---

[31] 森崎「破壊的共有の道」（前掲書、p.94）

[32] ミシェル・フーコー『主体の解釈学：コレージュ・ド・フランス講義 1981-1982 年度』廣瀬浩司、原和之訳、筑摩書房、2004 年、p.22。（Michel Foucault, *L'Herméneuthique du sujet: Cours au Collège de France. 1981-1982*, Gallimard, Seuil, 2001, p.19.）

[33] 石牟礼道子『苦海浄土』講談社、2004 年、p.15。

[34] 同書、p.17。

知れぬ者たちがあらわれると、九平少年はラジオの前にガンと坐って振りむかない」。[35] 水俣病になった人々にたいして「全身的につきあっていた」市役所衛生課吏員蓬氏は、歌謡曲十人抜きのど自慢、ついでプロ野球放送とラジオからはなれない九平少年をねばりづよく待ったあげく、診療のためのバスにのろうと声をかけますが、九平はかたくそれをこばみます――「いや。行けば殺さるるもね。」[36]

厚生省に提出された「細川一博士報告書」[37] をはさんでつづく「四十四号患者」と題された短い一節は、「九平の姉、さつき。四十四号患者。」[38]というそっけない一行からはじまります。そして、さつきについて語る母親千代のことばが、次のようにつづられます。[39]

> 舟の上でもあれが親方でしたもん。力は強し、腰は強し、あれがカシ網ひくときゃ、舟はゆらっともしよりまっせんじゃった。戦争中に娘になった子じゃったけん。男のごたるかと思えばこまごまと気のくばる子で。あれは踊りの好きな娘で、豆絞りの手拭いば肩にかけて、腰はすわっとったが身の軽うしてな。さつきしゃんが跳んでも、軽業の娘のごとして音もせんちゅうて、青年団の衆のいいよったが。舟の上でも、踊りのさまをして、ようううたいよった。[40]

踊りが、戦争からもどった村の青年男女の唯一の娯楽であり、さつきは、村のいちばんの踊りてだったろう、とつづられたあと、また母親のことばがつづきます。

---

[35] 同書、p.27。

[36] 同書、p.32。

[37] 『苦海浄土』の随所には、水俣病患者についての臨床所見が引用されている。

[38] 同書、p.44。

[39] 『苦海浄土』第３章「ゆき女きき書」をふくめて、石牟礼道子はまったくあたらしい書きものをつくりださなければなりませんでした。「きき書」は、いわゆる「聞き書き」ではけっしてない。――「「ゆき女きき書」と書いちゃったものですからね。そういうタイトルなんですね。聞き書きではないんですね。部分的には、もちろん聞いた事はあるわけですけど、あの、本当に聞き書きがあっていいと思うんです。……とにかく、未曾有のことを書かないといけないわけですからね。だから、ルポルタージュを書くつもりではなかったんですね。ですから、ああいう表現になったと思うんです。それが良かったか、悪かったか、分かりませんけど、一つの試みの表現として、今の状況を越えるには、表現はどうあらねばなぬかはやっぱり考えましたね。書くときは、もっと本能的に出て来ますから。」（「石牟礼道子、語る（1970年代インタビュー記録）」『アルテリ』10 号、2020 年、p.26-27。強調は引用者。）

[40] 石牟礼、前掲書、p.44。

おとろしか。おもいだそうごたなか。人間じゃなかごたる死に方したばい、さつきは。わたしはまる一ヵ月、ひとめも眠らんじゃったばい。九平と、さつきと、わたしと、誰が一番に死ぬじゃろかと思うとった。いちばん丈夫とおもうとったさつきがやられました。白浜の避病院に入れられて。あそこに入れられればすぐ先に火葬場はあるし。避病院から先はもう娑婆じゃなか。今日もまだ死んどらんのじゃろか。そげんおもいよった。上で、寝台の上にさつきがおります。ギリギリ舞うとですばい。寝台の上で。手と足で天ばつかんで。背中で舞いますと。これが自分が産んだ娘じゃろかと思うようになりました。犬か猫の死にぎわのごたった。ふくいく肥えた娘でしたて。九平も下の方でそげんします。[41]

大著である『苦海浄土』のなかで、「四十四号患者」はわずか９頁しか割かれていません。中枢神経が冒されて手足の動きが止まらないさつきの様子を、母親は「手と足で天ばつかんで」「ギリギリ舞う」と語ります。まったくわけがわからいまま、母親の目にはさつきが踊っているように見えたのです。この節のさいごに、石牟礼は、なにもことばをつけ加えることなく、『熊本医学会雑誌』（第三十一巻補冊第一、昭和三十二年一月）に掲載された「水俣地方に発生した原因不明の中枢神経系疾患に関する疫学調査成績」を引用します。

症例　第一例　山中、二十八歳女、職業漁業
発病年月日・昭和三十一年七月十三日
主訴・手指のしびれ感、聴力障碍、言語障碍、歩行障碍、意識障碍、狂想状態
（中略）
現病歴・三十一年七月十三日、両側の第二、三、四指にしびれ感を自覚し、十五日には口唇がしびれ耳が遠くなった。十八日には草履がうまくはけず歩行が失調性となった。また、その頃から言語障碍が現われ、手指震顫を見、時に Chorea（舞踏病）様の不随意運動が認められた。八月に入ると、歩行困難が起り、七日水俣市白浜病院（伝染病院）に入院したが、入院翌日より Chorea 様運動が激しく更に Ballismus 様運動が加わり時に犬吠様の叫声を発して全くの狂騒状態となった。睡眠薬を投与すると就眠する様であるが、四肢の不随意運動は停止しない。……
　入院経過・入院翌日より鼻腔栄養を開始、三十一日は入院当日同様の不随意運動を続けていたが、九月一日になると運動が鎮まり筋緊張はかえって減弱し四肢に触れても反応を示さなくなった。体温 39、脈拍数 122、呼吸数 33 で一般状態は悪化した。翌二日午前二時頃再び不随意運動が始まり狂騒状態となって叫声を発しこれを繰り返すに至ったが、フェルバビタールの注射により午前十時頃より鎮まり睡眠に入った。

[41] 同書、pp. 46-47。

午後十時に呼吸数 56、脈拍数 120、血圧 70/60mmHg となり翌日午前三時三十五分死亡した。[42]

この節のさいごに、石牟礼が無感情な「症例」の記述を引いたのはなぜでしょうか。[43] 作品の随所にさしはさまれた臨床報告は、はたして、医学的な観察知見をしめすことで、読者にこの病の現実性をよびおこすためのものでしょうか。それとも、「ある光景を知覚する瞬間に、ある言語を聞く」とされる「臨床のまなざし」をものみこむ対話の試みなのでしょうか。いずれにしても、こうした症例報告の明確に定義された語彙の雄弁さのなかに、わたしたちは無意味さを受けとらずにはおれません。「ビョウリガクハ死カラシュッパツスルノデスヨ」[44] —— ことばというものが、正確にものごとを記述すればするほど、その無意味さはよりはっきりと読者にあらわれます。そこでは「随意」か「不随意」かに関する臨床のまなざしと思考は宙吊りになります。そして、読者はおそらく、母親の目を、石牟礼の目をとおして、この無感動で無感情な臨床記述を読まずにはおれないでしょう。さつきは、たしかに、床で踊っていたのです。

石牟礼の肉体、その目、耳、手によって、あるいは、「五感には達しえないもの」をとおして、母親のことばも、症例報告も、たぐいまれなひとつの表現へと結晶しました。「未曾有のことを書かないといけない …… ですから、ああいう表現になった」。未曾有のできごとは、真理であることをやめます。母親のことばは事実を証言することをやめ、そして、症例報告は水俣病という病を医学的に記述することをやめて、ひとつの文学表現となって、わたしたちに倫理を語りはじめます。そこでは、「臨床」あるいは「臨床のまなざし」は宙吊りにされ、そのあるべきちから ——それが「対象」からうばいとるはずのちから—— をうしないます。つまり、生存者の「証言」と医学研究者によって真理とまっすぐにむかっていた「症例」記述は、アクセントを移され、予定されていたものとはべつの意味を文のなかに芽吹かせ、息づかせるのです。その表現は、なにかを代弁することもなく、事実や理論を証明することもなく、時と場所をこえて読者の肉体に語りかけ、読者はおのれにあたえられる猶予の時間のなかで、その語りかけるまぼろしの声に応答せずに

---

[42] 同書、pp.51-52。

[43] 同書第３章「ゆき女きき書」でも、「ゆき」の語り口とならんで、症例や観察記録がさしはさまれています。それはもはや引用ではなく、著者が「水俣病の死者たちとの対話を試みるための儀式」であることがわかります。「いかなる死といえども、ものいわぬ死者、あるいはその死体はすでに没個性的な資料である、とわたしは想おうとしていた。死の瞬間から死者はオブジェに、自然に、土にかえるために、急速営みをはじめているはずであった。病理学的解剖は、さらに死者となって、その死が意志的に行なうひときわ苛烈な解体である。その解体に立ち合うことは、わたくしにとって水俣病の死者たちとの対話を試みるための儀式であり、死者たちの通路に一歩たちいることにほかならないのである。」（同書、pp.180-181。強調は引用者。）

[44] 同書、p.170。

はおれません。その語りの声のなかにひびく無意味さに、けっして動かされずにはおれないのです。[45]

[45] たとえば、石牟礼は、彼女に名をよばれた九平少年が後ずさりして戸口のうちにはいったのを見て、「激情的になり、ひきゆがむような母性を」「自分のうちに感じていた」と書いています。（同書、p.17。）

５　あらがいの床

「水俣病は文明と、人間の原存在の意味への問いである。」[46] —— ならば、九平の「殺さるるもね」も、さつきの「ギリギリ舞う」も、それらのことばがつらなる文章とともに文明と人間の原存在の意味へとおくりかえされるのであり、だれかによって意味があてがわれてはなりません。ことばとことばがつらなり、網となってそれにあらがっています。[47] 森崎や石牟礼は、鉱床の、舟床の、床のうえのひとびととことばとがであわれることでうまれる、ひびきをかろうじて書きとっているように、わたしにはおもわれます。そのひびきは、対象を観察し、記述し、真理との関係をうちたてる近代の知の制度、声をあげて権利をうったえる制度、情報をひろくつたえる制度、患者をたすけるための医学や研究の制度、補償という制度にひそむゆがみやきしみとまじりあってひびきあい、書く者はそのふるえに手を動かされて書くのです。

書くとは、なにをすることでしょうか。はたして、手を動かすひとだけが書くひとなのでしょうか。著者とはだれでしょうか。書くひとと書かれるひとのあいだに口をひらくさけめとは、いったいなんでしょうか。記録と「きき書」のちがいはなんでしょうか。それは書かぬ者に手をかしだすことでしょうか。そして、わたしが引用符のなかでよびだすことばは、だれのことばでしょうか。書いているわたしは、引用符のなかでも、そとでも、だれかのことばをなんどもくりかえすほかに、なにをしているというのでしょうか。

声をあげることが、ともに声をあげることにほからないように、書くことは、ともに書くことにほかなりません。ともに書くことは、書く、書かれるといった、「能動」と「受動」にひきさかれることもなく、ましてや「中動」という文法でごまかされることもありません。また、ことばとは他者のことばである、とひらきなおることもできません。ともに書くとは、他者を、死者をじぶんのなかに住まわせ、他者と死者がわたしのなかで書き、わたしが他者と死者の手で書く、という気のふれた、ふれる、ふるえるこえ、ふるえそのものではないでしょうか。炭鉱のうたが、島のうたが、だれかののどをふるわせて、こえとして、ひびきとしてよみがえるように。ひとつの波のうたが、千のこえとなるように。

---

[46] 同書、p.250。

[47] ここでは問いと問われるものがたがいをふくみこみ、問いの外にたつことも、問われるものから切り離されることもできません。「認識といえば大げさですけれど、公害にしても差別にしても、まるっきりの糾弾でなく、まるっきりの頭垂れでなく、自分とどこか切れていてどこがつながっているのかを追求するのが常識とならないと、公害・差別の巨大なコンプレックス（複合体）としての水俣病の解決というものはないと思います。」（最首悟『水俣の海底から：「終われない水俣展」講演録』京都・水俣病を告発する会発行、1991 年、pp.52-53。）

「人間な死ねばまた人間に生まれてくっとじゃろうか。」[48] —— おなじひとつの問いを、なんどもなんどもくりかえし、くりかえすたびごとに、ことなるからだにひびかせ、つたえていく。そのために、想像力にみちた、からっぽの空間をじぶんのからだにたもって生きる。

> その日は病院も退屈してしもうて、どうせよその土地じゃ、ぼろ着て、こげなケイレン姿で踊っていようが、旅の恥はかき捨て、人が見て笑おうが、ただもう歩くぶんには迷惑かけぬし、と思うて歩くにも、こんなふうに、腰をうっちょいて、がっくんがっくん歩いて行きよった。大学病院は、ひろかとこばい。
>
> ぷらあぷらあ、自分では歩きよるつもりで、かねて行きなれん方に歩いてゆきよった。草がぼうぼう生えとる中をずうっと通って、えらいぽつんと離れた原っぱにきてしもうたなあ、と思うて見ると、箱の置いてあるような建物のしんとして、草の中にあった。なんやらさびしか所やったばい。
>
> 建物にゃ窓のついとる。ここは何じゃろかいとおもうて窓に目をひっつけて見よったら、人間ばマナイタの上に乗せて手術のありよる。はらわたばあっちなおし、こっちなおししよらす。こらえらい手術やなあ、と、うちは、窓からしんからみとった。[49]

大学は他者のことばをマナイタのうえにのせて「あっちをなおし、こっちをなおし」切りきざみます。「彼女の内臓は先生方によって入念に計量器にかけられたり、物さしを当てられたりしているようだった。」[50] それでも、ふるいふるい、もっとふるい哲学の記憶のなかで、死者のことばはふるえつづけます。それは、ながくつづくうたのようであり、だれかの耳のおくで、目のそこで、のどのなかで、手のうえで、他者のことばがふるえるとき、哲学は賢者であることも、学であることもやめて、てつがくというひびきになるでしょう。「りんしょう、てつがく」は、文明の、知の、真理の制度のゆがみときしみが発する声なきこえに応答し、それにあらがって脈うつ血肉となるべく、この名前を与えられたのではないでしょうか。

てつがくが行為そのものであるように、ともに語り、ともに書き、ともにうたい踊る。いずれも、語り、書き物、うた、おどり、として記録に残ることはありません。森崎もまた、ひとが「語る」ことを文字にすることについて、このように書いています。

> 何より大きなことは、「語る」という行為のおとろえである。私は今にして、ようやく悟っているのだが、文字信仰が現代の最良の知恵のごとく普遍化したのは、そう

---

[48] 石牟礼、前掲書、p.185。

[49] 同書、pp.183-184。

[50] 同書、pp.181-182。

古いことではないのだ。「語る」ということに、おそらく大きな意味合いを持つ文化が私たちの日本にも、つい先頃まであったのだ。そしてそこでは、文字化が可能な程度の知識や知恵ではなく、人の魂にしみとおる悠久の知恵が、年を重ねた人の体験からポトポトとしたたり、それを太陽や水や風といっしょに呼吸する聞き手たちがいたのだ。

これを私は理想図として書いているのではない。働きつつ生きるということを、私に熱心に話してくださった老女や老人は、あの時その話を文字にして欲しくて語ったのではなく、話し言葉と行為と、そしてそれを生かしていたおてんとさまにたいして、文字界も政界も財界もなんというケチくさい度量で人間を計るのか、と、無心に聞きたがる私の体に染みとおらせようと、私の反応に耳を澄ましつつ語っておられたのだ。記憶させる行為だった。

……

文字へと聞き書きをすることが大事なのではない。それは今の時代のさしあたっての手法にすぎないのであって、語ってくださったあなたの人生とその教えとを生かす世を求めつづけます、といえばいいのか。では、その世とは。その哲学は。[51]

ともに語り、ともに書くことで、あらがう、りんしょう、てつがく —— その使命は、他者の生と死、そして、そのことばを切りきざんで対象にする知の制度のきしみさえも、想像力のなかでひびかせ、のどと手をふるわせて教えをからだに染みとおらせ、太陽や水や風といっしょに呼吸する、そのための時空をつくりだすこと。いかなる世、いかなるときであっても、どのような場所であっても、輪となり、うたい踊りながら。

[51] 森崎和江「聞き書きの記憶の中を流れるもの」（『思想の科学』1992 年 12 月号、『まっくら：女坑夫からの聞き書き』（岩波書店、2021 年）所収、p.308-309。）